

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月 3日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530932

研究課題名（和文） 移民研究と教育現場をつなぐ学習教材の開発—日系ブラジル人に関する「移民スゴロク」

研究課題名（英文） Bridging Research and Education on Migration: Developing “Sugoroku” on Japanese Brazilians

研究代表者

森本 豊富（MORIMOTO TOYOTOMI）

早稲田大学・人間科学学術院・教授

研究者番号：30230155

研究成果の概要（和文）：本研究は、移民研究の成果を教育現場で活かす方策のひとつとして、日本の一般生徒と外国にルーツをもつ生徒に、日本人の海外移住の歴史的意義を教えるための参加型移民学習教材の開発を目的とした。そのための基盤作りとして、日系ブラジル人を対象とする移民学習教材「移民スゴロク」を作成し、横浜の公立小学校で利用したり、JICA 横浜での南米諸国の日本語教師を対象とした研修で利用したりした。

研究成果の概要（英文）： The purpose of this research is to develop educational materials on Japanese migrants abroad in order to teach Japanese pupils and the children of migrants alike the historical significance of the migration. As a case study, we focused on Japanese Brazilians and created “Imin Sugoroku” or Japanese traditional board game in which pieces are advanced on a world map by throwing dice. We tried the Sugoroku at a public elementary school in Yokohama and used it at a training session for those Japanese language teachers who came from South America as well.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：多文化教育

### 1. 研究開始当初の背景

移民学習、具体的には海外に渡航した日本人移民とその子孫に関する学習は、日本の小中高校でのカリキュラムではほとんど取り上げられていないのが実情である。日本の近代化の中で海外に渡航した「移民」に関しては、とかく否定的なイメージが先行しがちであるが、彼らが二国間関係や国際交流に果たした貢献は評価されるべきである。

日本にデカセギとして来日したブラジル人の若い世代は、景気の動向によって日伯間を行き来するが、その子ども達は二国間往來の過程で学業面、言語面、心理面において多くの課題をかかえている。しかし、一方で、二国間の橋渡し役として活躍する人材も育ちつつある。したがって、日本人の一般児童生徒と外国にルーツをもつ子供たち双方に日本人移民の歴史的意義を伝えていくことに

よって、グローバルな広い視野を持った人材の育成が期待できる。移民研究の成果の教育現場への還元方法として、外国にルーツをもつ生徒の歴史的、文化的背景を日本の一般生徒に紹介すると共に、そうした生徒達自身の自尊感情（セルフ・エスティーム）の涵養も図るものとして移民学習プログラムの開発は位置づけられる。

すでに開発されている移民学習教材としては、沖縄 NGO センターの『知ろう世界のウチナンチュ 沖縄移民』（2006）、『世界のウチナンチュ 発！ 多文化共生 CHAMPURREANDO』（2012）、『世界のウチナンチュかるた』（英語版、スペイン語・ポルトガル語版）、『石垣島で台湾を歩く』（2012）などある。また、海外移住資料館には、移民かるた、紙芝居、トランクなどの貸し出し教材があり、「学習活動の手引き」も準備されている。日系移民学習の理論と実践については、グローバル教育と多文化教育をつなぐ視点での啓発的な研究もある（森茂・中山 2008）。

移民スゴロクについては、東京外国語大学の在日外国人ネットワーク「アミーゴス」やブラジルのピラル・ド・スール日本人学校「ブラジル日本移民学習」の中での利用などの例がみられるが、本格的な開発は端緒に終わったばかりと言ってよかろう。ただし、類似した参加型移民学習教材として、ブラジルのドイツ系移民の子どもたち用にリオ・グランデ・ド・スル州ゲーティンステュートが開発した移民学習教材がある。

対象は在ブラジルのドイツ系ブラジル人中学生で、目的はドイツ人ブラジル移住に関する理解、設定は 1860 年代前後の移民、個人史を中心に展開し、ドイツの 6 都市からブラジル 3 つの州への移住ということになっている。6 色のカードは色ごとに、一人の移民に関する情報がまとめられており、同じ色のコマに対応している。各カードには、基本情報として、姓名、ドイツにおける職業と出身地、ブラジルの渡航先と職業などの情報が記載されている。この教材はフィクショナルな移民のライフヒストリーを通してドイツ系ブラジル移民の歴史を学ぶとともにドイツ語学習の教材にもなっている。

本研究では、海外移住資料館の小嶋茂氏と共に、このドイツ系ブラジル人の移民スゴロクに着想を得て、日系ブラジル人に関する歴史と現状についての「移民スゴロク（ブラジル版）」を作成した。

### 3. 研究の方法

本研究では、

(1) 移民の出身国と受入れ国において、移民学習教材はどのようなものが開発されているのかを、国内（沖縄・広島）とブラジル

（サンパウロ）を中心に調査する。

(2) それらの調査結果を踏まえて移民スゴロクあるいは類似したボードゲームに限定して調査する。

(3) 移民スゴロクを国際学級がある公立の小中学校で利用し、現場教師や生徒の意見を参考に改訂する。

(4) 南米諸国で日本語を教えている日本語教師の研修会での利用を検討する。以上を目的とした。

学びの目的としては、

(1) 日本人ブラジル移住 100 年の歴史概要（他国への移住）を理解する（→デカセギ現象との関連で、逆転した立場にあった過去を知る）

(2) 移住するとは、どのような体験を経ることかを知る（→異文化で生きることの葛藤やその対処を知る）

(3) 祖父母や父母が体験した事実を理解する（→歴史的・長期的視野をもち、その変遷を知る；自身の体験との比較の視点をもつ）

(4) 移住者の立場そしてホスト社会の立場、両方から見る視点を養う（→異文化や自分が置かれた立場への理解を深める；デカセギ子弟の現状への理解を深める）こととした。

移民学習教材の中でも移民スゴロクに着目した理由には、次のような点をあげることができる。

(1) 生徒はゲーム感覚で取り組むことにより、移民学習を受け身ではなく、参加型の遊び感覚で自然に楽しんで学ぶことができる。

(2) ボード（盤）ゲームの利点として、時間的、空間的に広範にわたる情報伝達が可能である。

(3) 移民スゴロクは世代を超えて楽しむことが可能であり、内容の難易度や情報量を換えることによって対象の変化にも対応できる。

3 年間の調査研究期間で、

(1) 初年度において、ブラジル日本移民史料館、全米日系人博物館、沖縄 NPO、広島、和歌山の移民関連施設での史料調査と聞き取り調査を行い、移民スゴロクに利用できる素材を収集し、それらの素材をもとに移民スゴロクの原型を作成した。

(2) 2 年目に実験校と海外移住資料館での試行的運用を経て改訂を繰り返した。

(3) 3 年目に「移民スゴロク・ブラジル版」を完成させ、横浜の公立小学校や JICA 横浜での南米を対象とした日本語研修でも利用した。

具体的には、クイズの内容として、全部で 80 問のクイズ、5 つの時代区分のもと、各時代 16 問程度（入替可能）を設定、選択肢は必ずしも日本人ブラジル移住に限定せず、他国への日本人海外移住に関する情報も盛り込む（→海外移住や日系社会の広がりへの理

解につながる)、可能な限り写真データ等視覚資料を添付して、関心を広げる、参考書を明示して、発展的活用を考慮する(特定のテーマへの理解を深める、生徒に課題を出すなど)。

5つの時代区分と具体的項目は次の通りである。

(1) 渡航前: 移住者の出身県、移住の理由、必要な手続き など。

(2) 船・船上: 船旅日数、寄港地、船内活動 など。

(3) 移住初期: 現地新聞報道、初めての体験、初めての職業 など。

(4) 戦前: 最初の日本語新聞、最初の小学校、食品雑貨店 など。

(5) 戦後: 大学入学者数、職業分布、全国的組織 など。

次に、具体的なクイズの質問と正解・解説について試作版の中から例をあげる。

Q1 沖縄からはじめて海外に集団渡航したのはいつだったでしょう。

- A. 1868 (明治元) 年
- B. 1885 (明治18) 年
- C. 1889 (明治22) 年

正解=C

解説: 日本人の海外への集団渡航は1868 (明治元) 年ハワイへ「元年者」(がんねんもの) と呼ばれる (=A)

1885年には、「官約移民」946人(倍率約30倍)が日布移民条約締結を受けて渡航(山口、広島、熊本等)

沖縄からは、明治元年から30年以上たった1899年(明治32年)に契約移民として26人がハワイに渡航

その後、沖縄からは1904(明治37)年にフィリピン・マニラに「ベンケット移民」(道路建設)360人、メキシコにも同じく明治37年に炭鉱労働者として223人渡航

#### 4. 研究成果

移民スゴロク(ブラジル版)は横浜市鶴見区にある潮田小国際教室で、担当の先生の指導のもと実験的に実施した。以下、観察記録をまとめる。

■実施日時: 2012年6月20日、10:30-13:40

■実施内容: 当日の国際教室には、4名の先生が来室。A先生のほか、B先生、C先生、D先生が担当。A先生は、最初の時間、日本に来て2週間というフィリピン人の女生徒に1対1でカードを使用して基本単語を教えた。その子が終わると、次の時間には1年生、4年生、5年生がそれぞれ2名、3名、3名とやってきた。この時点で、A先生はB先生と二人で1年生の面倒を見始め、スゴロクの盤のみを使って、地図上のマス数を数えて移動させる練習をして、数を数える学習を試した。

#### ■実施後のコメント:

(1) 1年生には、クイズがなくとも、盤だけでも、イラストがもう少し楽しくなれば、日本からブラジルへというルートやその移動を学ぶ道具として十分使える。

(2) 数字をふったマスのスペースが小さく、同じマスに複数人が入った際には使いにくい。

(3) 盤の大きさに関して、持参したのはA2サイズであったが、A1サイズの方が使いやすい(後日、A1サイズに改訂版を作成)。

(4) 5年生の算数を教えていた先生は、時間を見て10分程度盤なしでクイズだけを試した。分かりやすそうなクイズを選びつつ問題を出していたが、内容的にはまだ難しすぎて、小学校6年生以上向けである。

■研究協力者による実施: 昼食を国際教室の子供たちと一しょに図書室でとったあと、昼休みの10分程度を4年生の4名と一緒にスゴロクを実施。生徒は皆たいへん関心をもって「やりたい、やりたい」と言って参加。生徒たちに実際に声に出して読んでもらい、正解すればもう一回サイを振り、間違えばそのマスに留まるというルールで実施。音読は句読点が付いている箇所は読めるものの、句読点が付いていない文章は切れ目がどこかよく読めないケースが多々見られた。生徒たちの積極的な参加が実感でき、スゴロクを用いたの移民学習の効果が期待がもてた。ただし、文章がまだこの4年生の子どもたちには少し難しいので改善が必要。

以上の実施結果から

(1) 数人で行うことから、同じマスに止まれば同じ問題にあたり、選択肢の正解が一つである必要はなく、みんな正解、二つ正解なども十分機能する。どれを選んででも必ず正解というのは、声に出して読むことで覚えてもらえ、ゲームに変化があって関心をもってもらえる。但し、その基本的な約束として、問題を声に出して読んでもらうこととする。そして、そのためには、問題の文章を分かりやすく、読みための文章として使えるものに改良する必要がある。

(2) 記述内容に大事な内容が含まれていた選択肢が変更されていた箇所があり、もとに戻した方がよい箇所が散見された。

(3) 写真の選択をさらにレベルアップし、写真を見て「これは何でしょう」というクイズとしても使えるようなものを選ぶと用途が広がる。

以上が潮田小学校国際教室での実験的利用の結果である。この他に、JICA横浜において日本語教師研修を受けた教師10名に配布

(ブラジル・アルゼンチン・パラグアイ・ペルー)した。具体的には、赤間学園(サンパウロ市)、クリチーバ日伯文化援護協会日本語講座(クリチーバ市)、さくら学園(サン

ジョゼ・ド・リオ・プレット市) などである。また、今後、試験的活用を予定している在日のブラジル人学校には、茨城県のつくばエドゥカーレ校、常総オブソン校がある。

移民学習教材の開発も教育現場との連携なしには成り立たない。日本の公立学校の過密なカリキュラムの中に移民学習を採り入れることは容易ではないが、ブラジル人学校や海外の日本語学校での利用の可能性は高い。理想的には生徒自身が自主的に教材開発にかかわる「機能的学習環境の構築」ができれば学びは深まるであろう。また、インターネットを利用し多言語化した多言語オンライン化教材が開発されれば汎用性は高まりトランスナショナルな移民の動きが見えてくることにもなる。

本研究では、移民研究の成果を教育現場で活かす方策のひとつとして、外国にルーツをもつ生徒の歴史的、文化的背景を日本の一般生徒に紹介すると共に、そうした生徒達自身のセルフ・エスティームの涵養も図る移民学習プログラムの構築を目的とした。その試みは端緒についたばかりであるが、現場教師や生徒の反応の良さからも、参加型移民学習教材の教育効果が確認された。また、上述したように、南米(ブラジル・アルゼンチン・パラグアイ・ペルー)から日本語研修に訪れた日本語教師に「移民スゴロク・ブラジル版」を利用してもらうにとどまらず、各国の移民スゴロクを自ら作成することによって、今後、海外で利用が広まる可能性もでてきた。

今後の課題としては、

(1) 対象となる学年のレベルに応じた言葉の使い方や内容にさらなる工夫が必要である。低学年になればなるほど、作成の難易度はあがった。

(2) 公立学校でのカリキュラムの中で参加型移民学習教材を利用する時間の確保が容易でなく、国際学級などでの利用に限定された。

(3) オンライン移民学習教材の開発も当初の予定としては計画していたが、3年間の研究期間の中では達成されなかったため、今後の課題として残された。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計2件)

森本豊富、「日本とブラジルをつなぐ移民学習教材の開発」、IX Congresso Internacional de Estudos Japoneses no Brasil. Universidade Federal do Parana, Brasil 2012年8月30日

森本豊富、「移民研究の連携—資料の収集から活用まで」人の移動と21世紀のグローバル社会(特別教育研究経費[連携融合])琉球大学、2011年5月20日(招待講演)

〔図書〕(計2件)

森本豊富、2013、「移民研究の連携—資料収集から活用まで」、我部政明・石原昌英・山里勝己編著、『人の移動、拡散、融合の人類史—沖縄の経験と二一世紀への提言』、彩流社、289-298頁、総頁数410頁。

森本豊富・根川幸男編著、2012、『トランスナショナルな「日系人」の教育・言語・文化—過去から未来に向けて—』、明石書店、東京、総頁数262頁。

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

森本豊富 (MORIMOTO TOYOTOMI)

早稲田大学人間科学学術院・教授

研究者番号：30230155

### (2) 研究協力者

小嶋 茂 (KOJIMA SHIGERU)

海外日系人協会・職員

